



藤
人
木
古
墳



龍田川

1、今年のキーボード大会は日中友好交流

今年のキーボード大会は18名の来日中国人を中心にして東京学芸大学と昭和音楽大学で行われた。第一日目の武蔵小金井の東京学芸会場は研究発表が中心で、初参加の中国の動向の発表が話題となった。発表されたその主な点を紹介すると・・・

- a 北京では1985年ころキーボードを弾く人があり、95年には研究会発足。毎年、比賽（キーボードコンクール）を開催して技能を高め、多くの人の関心を得て来ている。
- b ハルビンでは1981年には活動を開始し、双排鍵電子琴（二段鍵盤キーボード）では若手の登竜門といわれるコンクールを開催して優秀な人材を出している。
- c 西安では元来、電気アコーディオンの奏者が養成されてきたが、電子楽器の導入により、キーボードと民族楽器との合体演奏が行われている。独奏もあるが重奏が特徴。
- d 四川ではヤマハのエレクトーンが重要視され、優秀な奏者が多く出ている。
- e 広東は国家戦略として音楽教育には莫大な投資が行われている。川中の大きな島全体をその根拠地とし、中心には大小さまざまな演奏会場や、各種の要望に応えられる施設をおいて、誰でも利用出来るようにし、そこから放射線状に各種の音楽養成施設が並び、星海音楽学院もその一つで1957年の創立。17の学科があり4000人以上の学生が学ぶというマンモス音楽学校。付属校として 生涯学習学院もあって、退職者が音楽を学べる。
- f 台湾では以前からキーボードが盛んに用いられていたが、最近では台湾東海大学を中心にハイブリッド・キーボードが実用化されていて、あらゆる音楽の演奏が可能である。

【演奏者紹介】



ロルフ・ブラッゲ

この日の最後を飾って圧巻だったのは、ウインから来日しているRolf Pllage ロルフ・ブラッゲ教授のピアノ演奏で、リストの「悲愴協奏曲」を、最初は大学教授との二重奏。次いで学生のハイブリッド・オーケストラとの共演で演奏した。

超絶技巧の連続60分に及ぶ演奏で会場を唖然とさせ、卓越した技巧と音楽の素晴らしさもさることながら、体力も超人的で、しばし拍手が鳴り止まなかった。

新百合ヶ丘の昭和音楽大学に会場を移した第二日は日中の若手演奏家の交流音楽会で、それぞれにお国柄を反映した若者らしい発表であった。曲目もバラエティに富み、ベートーベンに並んで現代曲があるかと思えば、中国唐代の古典曲や新作の現代曲も並ぶ、沖縄風にいうと「チャンプル音楽会」である。

このプログラムの曲目解説は私が行ったのだが、資料が乏しくて苦勞した。今回、多くの中国人音楽家と名刺交換をしたので、今後は助けてもらえるかもしれない。

2、もみじとギンナン

TVニュースで「もみじ便り」を報じており、拙宅近くの龍田川は緑色だが、談山神社は紅葉の盛りらしいので、気分転換もかねて出掛けた。談山神社は桜井市にあり、その昔、藤原鎌足が蘇我入鹿を倒すために中大兄皇子と談合した所。紅葉三千本は「関西の日光」といわれる。ところが山に差しかかると車の混雑がひどい。昔、参拝の駐車場に入れようとしているので、当方は車列の横を擦り抜けて山を一巡りして戻ってきた。赤いカエデの立派なのが数本見えたが、あとは杉の緑である。

これに比べると、広い天理大学キャンパスに沿う道のイチョウ並木が素晴らしかった。天を突くように高く大きなイチョウが見事に黄色くなって並んでいる。

イチョウといえば「ギンナン」 今朝の新聞には奈良の古刹の大安寺住職の話が載っていた。大安寺のイチョウは大木で取り切れないほどのギンナンが実るので、欲しい人には「どうぞ」ということになるのだが、黙って取り皮を散らかしていく者がいて怪しからんという御説であった。そういえば、わが家があった烏坂妙立寺も同様で……

「黙って取ると泥棒ですよ」

「落ちてるのを拾っただけだ」

「落ちていたなら警察へ届けなさい」

「ケチケチするな」

「ケチるのではない、自然からの素晴らしい贈り物に感謝してほしい。」

なお、念のために記すが妙立寺のギンナンは真っ白に精製してお歳暮として檀家の皆様へ配布されている。天理大学のギンナンは、誰か精製して配布しているのだろうか。

小遊三では無理だろな。



月末の土日は「龍田川紅葉まつり」(短歌・俳句の吟行や茶会)だった。

千早振る 神代も聞かず 龍田川

からくれないに 水くぐるとは 在原業平

嵐吹く 三室の山の もみじ葉は

龍田の川の 錦なりけり 能因法師



わが家から龍田公園へは奈良特有の曲った細い道で、一方通行の出口にも当たるので、遠回りして行ってみた。しかし「車はお呼びではない」と路上停車は許されず、駐車場は狭くて空かず、結局、紅葉も出店も喫茶も楽しめずにドライブするだけで帰ってきた。肝心の紅葉は「緑の黒髪に赤毛交じり」状況で、紅葉は遅れているようである。

近くの信貴山も紅葉の名所と聞くが、龍田川や三室山と大差はないと思われる。また、古墳の集積地「馬見丘公園」や、かぐや姫の「竹取公園」なども行楽地としては家族連れで賑わっているが、紅葉はもう少し後であろう。

(後記) 一週間後に再び龍田公園へ行く。紅葉が進んでいたが人出はなかった。

ブータン国王の言葉

《 福島で小学生たちに 》

みなさんの心の中にある人格という籠を養いなさい。
歳を取って経験を積むほどに大きくなって強くなります。

《 京都にて 》

物質的豊かさよりも心の豊かさを求めて行くことが大切だと思います。

個人よりも公共の豊かさが皆の幸せになるのです。

《ブータンの王に日本が教えられ》（新聞の川柳）



3、譲り譲られ

大阪から乗った大和路線の電車の四人掛けの「優先席」は、私共二人の前は若い二人であった。このお二人、買い物をして来たらしくお喋りに夢中で、辺り構わずに大きな声で笑い合っている。車内は混んできて、横には小柄な老人夫妻が立ち、電車の揺れと共に体も大きく揺れているが、二人は傍若無人、見向きもしない。

突然に私の頭上から大声が響いた。見ると体格の良い外人女性である。若い二人に向かい「席を譲ってあげなさい！ 私が座りたいのではない！ ご老人を座らせなさい！」と言って強引に席を立たせ、老人に手を添えた。だが、困ったのが老婦人で、「座っていいでしょうか。私は立っていてもいいのだけど」などと言っている。追い出したのでは申し訳が無いと言っているようだ。

この電車では私も何度か席を譲ってもらった。目が合った瞬間に立ち上がって「どうぞ」と言われるので「ありがとう」と素直に受けて座る。「大阪人は親切」と心が和む。譲るのも譲られるのもこうしたタイミングが大切で、強制される前に行えば気持ちいい。

4、再びエスカレーター

東京駅で新幹線から中央線に乗り換えた際、長いエスカレーターの左側に一列になって昇る人達を見て、私はほっとしていた。駆け登る人は居ないが、「お急ぎの方はどうぞ」と空けている。

そういえば、沖縄の那覇空港にも長いエスカレーターがレストラン階へ向かっていたし、福岡の天神にも長いのがあった。人がどちら側に立っていたのか覚えがない。

奈良新聞の読者欄にエスカレーターのことが載ったことがある。「江戸の武士は刀を使うために右を空け、大阪商人はソロバンを持つため左を空けた。現代の東京では、右手に荷物。大阪では左手に荷物を持つ人が多い」とのこと。ホントカナ？

音楽研修の交流時間にこんな話題を出したら、和歌山県人のM先生は「そんな区別は気づかなかった」といい、中国広州のS教授は「今は人が多い時代。みんなそれぞれに急いでいるから、エスカレーターも右左というより二列に昇ればいい」と言う。

これが正解でしょうな。駆け登りも駆け下りもなしに 順に二列で。

分け入りて 芒の波に埋もれけり ベットにも七五三あり春日宮
 縁に座し 熟柿召さるる老母かな 袴から靴先覗く 千歳鮎
 大寺の御手洗の水 澄みにけり 逆らえぬ流れがあって 現在地
 舞う巫女の指に纏わる 秋日差し オリンパス・レンズの曇り 拭われず
 城跡に紅葉散るまま積もるまま 強がりを持って歩調が狂いだす
 空堀に冬菜育てる 老夫婦 温め酒 この世に未練 今少し



**** 《とり急ぎ》 ****

「奈良・いかるが便り」が16号となり、今年も終わりと思っておりましたら、美濃輪のお稲荷さんが全焼したとのニュースが入って来ました。私にとって極めて残念な話であり、援助も何も出来ない身では悔しさをどこへもぶつけようがありませんが、幾つかを記させていただきます。

私が美濃輪のお稲荷さんに親しんだのは昭和21年から23年頃までの僅かな時間ですが、父母の言う世界とは異なる世界があることを教えてくれた所です。

当時の私の『町』と言えば『次郎長通り』で、宮加三の自宅から村松南の湿地帯(現在の陸上競技場あたり)を溝を飛び越えながら行くと清水小学校です。ここは、私が通った不二見小より立派だといわれ、校舎は少し前の地震で傾き、柱で支えられていましたが、演奏会場となる講堂があることは、他校には真似出来ぬ格式高いものでした。

お稲荷さんはその先。お祭りともなると境内一杯に何やら判らぬ店が並び、懸命に品物売っています。妙な雑誌を10冊以上も積み重ねて「○銭だ！さあ買え！さあ殺せ！」と喚く男。「この当たり籤を引いたら○銭差し上げるよ！」と奇妙な手品で金銭を巻き上げる男 等々。小遣いを持たぬ私には参加は出来ぬが、不思議と追われることもなかったのは、知らぬうちに客集めの手伝いをしていたからでしょう。

丁度その頃復活した『清水港祭り』も次郎長通りが一番だったと思います。港橋から波止場へ向かうと米軍の基地があって銃を持った海兵がいましたが、その先が祭りのメイン会場で、商船学校の練習船が幾つも並んで船内見学をさせてくれました。

その後、『清水艦砲射撃(54年目の聞き書き)』=(原本は清水中央図書館蔵)で、私が調べた際、米軍の艦砲は清水地区の巴川から西側一帯に落ち、多くの人命が損なわれたこと、お稲荷さんもその際に砲弾で失われたと聞きました。戦中のことでさえ忌まわしいのに、平和な今、放火によって失われたとする各種報道に慄然たる思いがします。

昨今、見たくもない報道が多過ぎます。どこか何かが間違っていて、いつの間にか狂気の世界が出現してしまっているのではないか、こうした世界を作り出した一因に教育があったのではないか、さすれば、私にも責任がある。と思わざるを得ません。

今回の火災、人的損害や類焼がなかったのが不幸中の幸いというのでしょうか？

関係する皆様にお見舞いを申し上げます。